

高校生の生活と性に関する意識調査 - 1984年の調査結果との比較 (性交経験の有無とその背景を中心に) -

池田 かよ子・久保田 美雪
小林 正子・渡邊 典子

新潟青陵大学看護学科

A survey on the life of high school students and on their consciousness about sex - the comparison with the survey in 1984 (mainly focused on their sexual intercourse and its background) -

IKEDA Kayoko · KUBOTA Miyuki
KOBAYASHI Masako · WATANABE Noriko

NIIGATA SEIRYO UNIVERSITY
DEPARTMENT OF NURSING

Abstract

A survey was made to high school student in Niigata prefecture about their daily life, how much information they have got about sex, and to what degree they have been conscious of sex and then we compared the result in 2001 with that in 1984 on their experience of sexual intercourse. (the number of answers for our questionnaires was 475, among them 219 was boys, 255, girls.)

(1) Those boys who have already experienced sexual intercourse have more dissatisfaction and discontent feelings towards their family life or to their school life than girls, but they establish much greater satisfaction for the relationship with their friends.

(2) About sex information, boys have more chances to get in touch with such information about sex as comic magazines, pornography, cellular phone mails and so on. Most of those who have already had some sexual contact are much interested in these information and have strong desire to know about sex. (3) They (both boys and girls) have far more positive and generous attitudes toward sexual intercourse than in 1984. And especially this positive attitude can be found in among girls. According to them, sexual intercourse might be allowed if they love each other, they admit, and as many as 75% of them agree to this attitude. (4) On the whole, the rate of their experience of sexual intercourse has increased amazingly high compared with that in 1984, and especially that of girls has reached 26.6%, which surpasses boys. (5) What they want to know most about sex in general is what love is. Of course, this is an eternal and spiritual theme for the young and so it is worth while to listen to them so that we can understand their interest for sex. (6) It is true, what is called 'sex education' is conducted at every school in Japan, depending on their ages, from an elementary school to junior and senior high, but about half of the students in their answers to our questionnaires say that their sex education at school is not helpful or useful to them. We have simulated growth of a snowflake and that of a flagellum using StarLogo, which is a programmable

modeling environment for exploring the workings of decentralized systems. Although both of them are cases of self-assembly, the models we used for them are somehow different. The model we used for snowflake is that new particles stick on the surface of the already assembled cluster. On the other hand, for flagellum, we used the model in which new particles appear inside the cluster and inflate it. The method of simulation in both cases is to use cellular automata, and thus the simulation steps are processed in a parallel fashion.

Key words

high school students sex information sex consciousness Sex action Sex education

要旨

抄録：新潟県内の高校生に、日常生活面や性情報、性意識に関してアンケート調査を実施し、性交経験の有無を中心に前回の調査結果と比較検討を行った。(有効回答数男子219名、女子255名) ①性交経験者の男子は家庭や学校生活に不満感はあるが、友人関係では満足感が高い。②性に関する情報に男子がより接する機会が多く、性交経験者では興味や関心が高い③性交をしてもよい条件としては「愛があればよい」という積極的で寛容な意見が1984年よりもさらに増え、その傾向は女子に強く75%と高値であった。④性行動の経験率は、1984年に比べ全体的に増加し、特に性交経験率では女子が26.6%と男子を超えている。⑤性について知りたいことは、「愛とは何か」という精神的なテーマが依然高かった。⑥性教育は小・中・高等学校で、年齢に対応した内容を実施しているが、評価としては約半数の者が「役に立っていない」と回答している。

キーワード

高校生 性情報 性意識 性行動 性教育

I はじめに

1984年（昭和59年）に県内の「高校生の生活と性に関する意識調査」を実施してから、20年近くが経過した。その間、私たちを取り巻く環境や社会情勢は様々に変化してきている。中でもIT革命に象徴されるように情報化の進展には眼を見張るものがある。また女性の社会的進出と地位の向上、さらに男女共同参画社会の推進、個人の自由や権利を尊重していく社会的な規範の中で、価値観や生活行動が大きく変わってきている。これらの変化の中で、思春期にある若者たちの価値観も多様化し、意識や行動に大きな変化がみられ社会的問題が表出している。特に性に関しては、性情報に翻弄され、性意識の解放と積極化、また性行動の低年齢化と加速化現象、さらに10代の人工妊娠中絶や性感染症の増加など、まさに若者の性の危機的な状態であるといえる。そのような状況の中で、現在の高校生の生活や性に関する意識や行動について調査をすることによって、その変化を把握し評価していくことが重要である。さらにその分析の上にならば、思春期の若者に即した性教育や性に関する相談のあり方を追及していくことが大切であろう。

そこで前回の調査をもとに、アンケート調査を実施し、全体的な変化の内容や性交経験の有無と日常生活や性意識などいくつかの視点で検討したので報告する。

II 調査対象と方法

1) 対象

対象は、調査内容が性に関するものであるため、調査の協力が得られた高等学校に限定

し、県内の3校の公立普通高等学校で共学の高校生を対象とした。

2) 方法

2001年7月から9月に各校の教諭を通じて、調査用紙と封筒を配布し、プライバシーを守るため及び回答内容の正確さを期するために、生徒が自記し各自で封筒に入れ教諭が回収する方法を用いた。

調査内容は以下の項目について行った。

①社会的適応：家庭や学校生活、友人関係の満足度について ②性情報：性に関する記事やアダルトビデオなどの接触状況とそれらに対する感じ方 ③性意識：性についてのイメージや性交の捉え方 ④性行動：性行動の経験率や避妊について ⑤性教育：性について知りたいことと性教育の内容についてである。

調査用紙配布数は548名で、有効回答数474名（86.0%）うち男子が219名、女子が255名であった。調査対象者の属性は表1に示すとおりである。（表1）

III 調査結果

1) 社会的適応について

社会的適応として、家庭・学校・友人関係の満足度を1984年と2001年を比較し表2に示した。

まず家庭の満足度については、男子は45%、女子は54～59%と両年とも捉え方に大きな変化はみられなかった。また学校生活への満足度では男子の場合、「楽しい」29.4%が48.4%、女子は40.6%が50.9%と1984年より2001年の方が増え、男女とも約半数が満足している。友人関係の満足度では、家庭の満足度と同様に

表1 対象の属性 (人)

	1984年			2001年		
	男子	女子	総数	男子	女子	総数
性交経験者	43	30	73	34	67	101
性交未経験者	575	474	1049	178	185	363
無回答	0	0	0	73	3	10
総数	618	504	1122	219	255	474

表2 家庭・学校・友人関係の満足度 (%)

	男子		女子	
	1984年	2001年	1984年	2001年
<家庭>				
楽しい	44.7	45.1	54.4	59.2
どちらともいえない	47.3	46.3	38.8	36.2
楽しくない	8.0	8.6	6.8	4.6
<学校>				
楽しい	29.4	48.4	40.6	50.9
どちらともいえない	43.2	30.1	43.7	32.2
楽しくない	26.9	21.5	15.5	16.9
<友人>				
楽しい	35.6	35.6	38.9	42.7
どちらともいえない	53.3	56.5	53.3	49.8
楽しくない	11.1	7.9	7.8	7.5

両年の差はなく、男子35%、女子38～42%と約4割の者が友人とのつきあい方に満足していることがうかがえる(表2)。

次にそれぞれの満足度と性交経験の有無について表3に示した。家庭、学校、友人関係について満足していると思われる「楽しい」という項目に注目した。まず家庭の満足度と性交経験の有無では、男子の場合1984年は「楽しい」が経験者22.5%に対して未経験者15.6%と経験者の方に満足度が高かった。しかし2001年では、「楽しい」が経験者38.2%に対して未経験者48.3%と未経験者の方に満足度が高く、経験者では家庭の満足度が低くなっていた。女子の場合は「楽しい」が1984年では経験者6.9%に対して、未経験者10.2%であり、2001年でも経験者56.7%に対して未経験者63.8%と両年とも未経験者の方が高かった。ただ未経験者、経験者ともに1984年より2001年の方が満足度の割合が大幅に増加していた。

学校生活と性交経験の有無では、男子の場合1984年は「楽しい」が経験者31.7%に対して未経験者27.5%と経験者の方に僅かではあるが満足度が高かった。しかし2001年では経

験者44.1%に対して未経験者48.3%と未経験者の方が若干高く、経験者も未経験者も4割の者が満足していた。女子の場合1984年は、「楽しい」が経験者24.1%に対して未経験者39.6%と未経験者の方に満足度が高い。2001年では、経験者53.7%に対して未経験者50.2%とどちらも半数の者が満足しており、家庭の満足度と同様に経験者も未経験者も1984年より満足度の割合が増えた。

友人関係と性交経験の有無では、男子の場合1984年は「楽しい」が経験者45.0%に対して未経験者37.7%と経験者の方に高く、2001年も経験者51.5%に対して未経験者32.4%と両年とも経験者の方が友人関係に満足している。また女子の場合1984年は経験者28.2%に対して、未経験者38.9%と経験者の方に満足度が低いのに対し、2001年では経験者49.3%に対して未経験者40.5%と未経験者の方が満足度が低かった。

次に「楽しくない」というどちらかといえば不満と思われる項目についてみると、まず家庭と性交経験の有無では、男子の場合1984年は経験者22.5%に対して未経験者11.0%と経験者の方が高かった。また2001年でも経

験者23.5%に対して未経験者4.5%と経験者の方が約6倍であった。同様に女子をみると、1984年は経験者17.2%、未経験者15.0%、2001年は6.0%、5.4%と経験の有無による差はみられず、2001年の方が低くなっていた。

また学校生活については、男子の場合1984年は経験者39.1%に対して未経験者29.2%と経験者の方に「楽しくない」が多く、2001年も経験者41.1%に対して未経験者17.4%と経験者の方が多かった。女子の場合は1984年の経験者37.9%に対して未経験者17.1%で経験者の方が多かった。2001年は経験者も未経験者も16%とほぼ同数で変わらなかった。

友人関係については、男子の場合1984年では経験者と未経験者は12%と差はなかったが、2001年では経験者15.2%に対して未経験者6.3%と経験者に2倍多くみられた。女子では、1984年は経験者14.3%に対して未経験者8.8%と経験者の方が多かったが、2001年では、経験者が僅か1.5%で未経験者より少なかった(表3)。

2) 性情報について

性情報として、週刊誌や雑誌などの性行動に関する内容や記事の接触頻度については「よく読む」「時々読む」「一、二度読んだことがある」まで含めると、男女とも8~9割は接している。「読んだことがない」者が

1984年に比べ2001年の方が、男女とも増えている。これらの性情報に対する反応は、1984年は男子「興味深かった」女子「ほんの一部の人の話だと思った」が最も多く、2001年は男女とも「興味深かった」が最も多かった。次に多いものとして「一般的にみんなもそうなんだ」「みんなに比べて自分は遅れている」が続いており、男女とも同じ反応がみられた(表4)。

また性交経験の有無でみると、表5のように男子は両年とも経験者の方が「よく読む」「時々読む」を合わせると8割に達している。女子の場合は「よく読む」「時々読む」を合わせると1984年の方が、経験の有無に関係なく8割前後接している。さらに女子は2001年の性交経験の有無では、「よく読む」「時々読む」が経験者の方に高かった($p < 0.01$)。また「一、二度読んだことがある」「読んだことがない」は未経験者の方に高かった($p < 0.01$)。

またその反応は、2001年の調査のみであるが、多かった項目として経験者の男子では「興味深かった」55.2%、「もっと読みたい」27.6%であり、女子は「興味深かった」52.4%「一般的にみんなもそうなんだ」36.5%であった。経験の有無に有意差のみられたのは、女子のみであり、「興味深かった」「もっと読みたい」は経験者に高く、「みんな

表3 家庭・学校・友人関係の満足度と性交経験の有無

(%)

	男子				女子			
	1984年		2001年		1984年		2001年	
	経験者	未経験者	経験者	未経験者	経験者	未経験者	経験者	未経験者
<家庭>								
楽しい	22.5	15.6	38.2	48.3	6.9	10.2	56.7	63.8
どちらともいえない	55.0	73.4	38.2	47.2	75.9	74.8	37.3	30.8
楽しくない	22.5	11.0	23.5	4.5	17.2	15.0	6.0	5.4
<学校>								
楽しい	31.7	27.5	44.1	48.3	24.1	39.6	53.7	50.2
どちらともいえない	29.3	43.4	14.7	34.3	37.9	43.5	29.9	33.0
楽しくない	39.1	29.2	41.1	17.4	37.9	17.1	16.4	16.8
<友人>								
楽しい	45.0	37.7	51.5	32.4	28.6	38.9	49.3	40.5
どちらともいえない	42.5	50.3	33.3	61.4	57.1	52.4	49.3	49.7
楽しくない	12.5	12.1	15.2	6.3	14.3	8.8	1.5	9.7

表4 性行動に関する情報（週刊誌や雑誌）の接触頻度と反応 (%)

	男子		女子	
	1984年	2001年	1984年	2001年
<接触頻度>				
よく読む	18.4	17.8	20.6	8.3
時々読む	57.3	44.9	56.5	44.4
一・二度読んだことがある	19.5	20.6	19.8	35.7
読んだことがない	5.0	16.8	3.0	11.5
<反応> (複数回答可)				
興味深かった	25.7	47.6	20.8	36.4
みんなに比べて自分は遅れていると思った	11.8	15.3	14.2	24.4
ほんの一部の人の話だと思った	17.3	14.7	22.6	13.8
作り話だと思った	12.7	7.6	5.9	6.9
一般的にみんなもそうなんだと思った	10.1	20.0	13.7	31.8
自分もっと大胆に行動してよいと思った	4.5	3.5	1.9	2.3
異性との交際には気をつけようと思った	5.4	12.4	12.0	13.8
もっと読みたいと思った	6.4	14.7	5.8	8.3
その他	0	3.5	0	5.0

表5 性行動に関する情報（週刊誌や雑誌）の接触頻度と性交経験の有無 (%)

	男子				女子				
	1984年		2001年		1984年		2001年		p(①vs②)
	経験者	未経験者	①経験者	②未経験者	経験者	未経験者	①経験者	②未経験者	
<接触頻度>									
よく読む	47.5	19.1	26.5	16.1	48.3	20.4	16.4	5.5	**
時々読む	47.5	58.4	55.9	42.0	34.5	59.3	49.3	42.1	**
一・二度読んだことがある	0	18.5	11.8	23.0	17.2	17.7	29.9	38.3	**
読んだことがない	5.0	4.1	5.9	19.0	0	2.6	4.5	14.2	**
<反応> (複数回答可)									
					p(①vs②)				
興味深かった	—	—	55.2	45.6	—	—	52.4	29.6	**
みんなに比べて自分は遅れていると思った	—	—	0	15.8	—	—	7.9	31.6	**
ほんの一部の人の話だと思った	—	—	20.7	14.0	—	—	6.3	17.1	*
作り話だと思った	—	—	17.2	5.9	—	—	11.1	5.3	
一般的にみんなもそうなんだと思った	—	—	17.2	19.9	—	—	36.5	30.3	
自分もっと大胆に行動してよいと思った	—	—	6.9	2.9	—	—	1.6	2.6	
異性との交際には気をつけようと思った	—	—	3.4	14.7	—	—	6.3	17.1	*
もっと読みたいと思った	—	—	27.6	11.0	—	—	19.0	3.9	**
その他	—	—	10.3	2.2	—	—	4.8	4.5	

(2001年の調査のみ)

* p < 0.05 ** p < 0.01

に比べて自分は遅れている」「ほんの一部の人の話だと思った」「異性との交際には気を

つけようと思った」は未経験者の方に高かった(表5)。

次にアダルトビデオの視聴頻度についてみると、表6に示すように男子の方が圧倒的によく接している。その反応は男子では「面白かった」「興奮した」「すごい」が多くみられ、女子では「すごい」「恥ずかしい」「どぎつい」であった。これらの反応は、1984年と2001年とも同じ傾向がみられた。また「見たことがない」という者が、男子では1984年は3.5% 2001年29.8%、女子では41.7%が66.7%と男女とも2001年の方が増加していた(表6)。しかし、男子はアダルトビデオの視聴頻度と性交経験の有無では、経験者の中には「見たことがない」という者が一人もおらず、アダルトビデオに対する関心が非常に高いことがうかがえる。さらにその反応は、「面白かった」が男子の56.3%あり、未経験者より高かった($p < 0.05$)。有意な差はなかったが、他に多いものとして「興奮した」「すごいと思った」「また見てみたいと思った」などが続いている。また女子では、「すごいと思った」が経験の有無に関係なく5割と最も多かった(表7)。

ビデオの入手方法として、1984年と2001年

ともほとんどが「友人から借りた」が男女とも最も多かった。女子では「自宅で見つけた」が37%もあり1984年よりもさらに増えている。また「その他」の中には、「友人や彼氏の家で見た」が多く、自分の意思とは関係なく接していることが考えられる(図1)。

3) 性意識について

性についてのイメージは、「お互いの愛を確かめ合うにはセックスは必要だ」という肯定的な項目が女子の場合のみ1984年の22.2%が2001年に36.9%と高くなっているだけであり、他の項目はすべて2001年より1984年の方が高かった。一方、否定的な項目では男女とも1984年よりも2001年の方がすべての項目で低くなっていた(表8)。

さらに2001年の性についてのイメージと性交経験の有無では、肯定的なイメージは男女とも未経験者に比べて経験者の方がすべてにおいて肯定的に捉えられている。特に顕著な変化がみられた項目として男女とも共通しているものは、表9に示したように、「セックスは楽しいもの」「セックスは人間にとって

表6 性行動に関する情報(アダルトビデオ)の接触頻度と反応 (%)

	男子		女子	
	1984年	2001年	1984年	2001年
＜接触頻度＞				
よく見る	27.6	11.2	0.4	0.8
時々見る	51.8	34.9	6.5	3.1
一・二度見たことがある	16.8	24.2	51.4	29.4
見たことがない	3.5	29.8	41.7	66.7
＜反応＞ (複数回答可)				
面白かった	35.1	38.3	8.9	14.3
くだらないと思った	8.3	10.7	8.0	13.1
興奮した	40.5	36.9	3.5	10.7
すごいと思った	28.8	32.2	22.9	51.2
たいしたことないと思った	19.7	8.1	7.6	11.9
恥ずかしいと思った	4.7	2.7	11.3	15.5
どぎついと思った	7.3	6.7	15.5	17.9
汚らしいと思った	10.4	5.4	9.5	11.9
また見てみたいと思った	21.0	23.5	3.9	8.3
その他	0	3.4	0	13.1

表7 性行動に関する情報(アダルトビデオ)の接触頻度と性交経験の有無 (%)

	男子			女子		
	2001年			2001年		
	①経験者	②未経験者	p(①vs②)	①経験者	②未経験者	p(①vs②)
<接触頻度>						
よく見る	12.1	10.8		1.5	0.5	
時々見る	69.7	27.8		6.0	2.2	
一・二度見たことがある	18.2	25.6		56.7	19.5	
見たことがない	0	35.8		35.8	77.8	
<反応> (複数回答可)						
			p(①vs②)			p(①vs②)
面白かった	56.3	34.8	*	19.0	9.8	
くだらないと思った	12.5	10.7		9.5	17.1	
興奮した	50.0	32.1		11.9	9.8	
すごいと思った	31.3	32.1		50.0	51.2	
たいしたことないと思った	9.4	8.0		14.3	9.8	
恥ずかしいと思った	3.1	2.7		9.5	22.0	
どぎついと思った	3.1	8.1		19.0	17.1	
汚らしいと思った	0	7.1		11.9	12.2	
また見てみたいと思った	31.3	21.4		9.5	7.3	
その他	6.3	2.7		9.5	17.1	

(2001年の調査のみ)

* p<0.05 **p<0.01

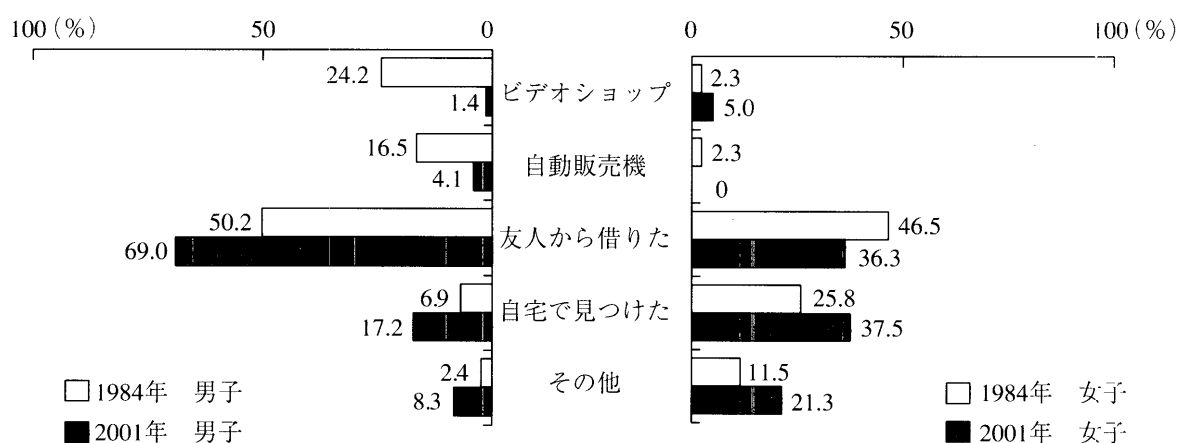


図1 アダルトビデオの入手方法

表8 性についてのイメージ(複数回答可) (%)

		男子		女子	
		1984年	2001年	1984年	2001年
肯定的	セックスは楽しいものである	76.4	41.5	39.9	22.6
	セックスは人間にとって大切なものである	92.9	71.8	84.4	61.4
	性について関心がある	91.9	65.7	75.2	50.8
	性に関する事柄についてよく考えることがある	64.4	34.9	41.9	27.0
	お互いの愛を確かめ合うにはセックスは必要だ	46.8	44.8	22.2	36.9
否定的	性的欲求はできるだけ抑えるべきである	48.9	34.4	61.6	19.4
	セックスはいやらしいものである	20.6	12.9	21.4	7.5
	性に関することを人前で口にすべきではない	28.8	26.2	26.3	13.5
	性についての話を聞くのは耐えられない	8.7	8.1	9.1	4.7
	男性は、女性をセックスの対象としか見ていない	12.0	6.6	10.9	6.7

大切なもの」「お互いの愛を確かめるためにセックスは必要である」という3つの項目が、1984年に比べて2001年の方が大きく上昇している。否定的なイメージについては、男子の「性的欲求はできるだけ抑えるべきである」が未経験者37.9%に対して経験者17.5%と1/2に減り、女子では「性についての話を聞くのは耐えられない」が未経験者6.5%に対して経験者ではみられなかった(表9)。

性交をしてもよい条件として図2に示したように、男子の場合1984年に比べて減っているのは「結婚したらよい」であり、他の項目は僅かずつ増え、中でも「愛があればよい」は63.7%であった。女子の場合は1984年に比

べて、2001年は「結婚したらよい」「婚約者同士ならよい」があきらかに減少し、「愛があればよい」が57.8%から76.3%と高くなっていた。また「愛がなくてもよい」は兩年とも女子より男子に多く、14%であった(図2)。

性交をしてもよいとする条件と性交経験の関連は、男子の場合1984年の経験者は「婚約者同士ならよい」という意見がなく、「愛があればよい」が61.0%、さらに「愛がなくてもよい」が36.6%と4割近くを占めていた。2001年では経験者の「結婚したらよい」という意見がなくなり、「愛があればよい」が67.6%と僅かに増えた。「愛がなくともよい」は29.4%と減少した。

表9 性についてのイメージと性交経験の有無(複数回答可) (%)

		男子		女子	
		2001年		2001年	
		経験者	未経験者	経験者	未経験者
肯定的	セックスは楽しいものである	79.4	33.9	53.7	10.9
	セックスは人間にとって大切なものである	94.1	67.4	83.6	53.0
	性について関心がある	82.4	62.2	68.7	44.3
	性に関する事柄についてよく考えることがある	47.1	32.2	44.8	20.2
	お互いの愛を確かめ合うにはセックスは必要だ	91.2	36.8	68.7	25.0
否定的	性的欲求はできるだけ抑えるべきである	17.6	37.9	20.9	18.5
	セックスはいやらしいものである	18.2	12.1	11.9	6.0
	性に関することを人前で口にすべきではない	20.6	26.7	10.4	14.7
	性についての話を聞くのは耐えられない	5.9	8.1	0	6.5
	男性は、女性をセックスの対象としか見ていない	5.9	5.8	4.5	7.6

(2001年の調査のみ)

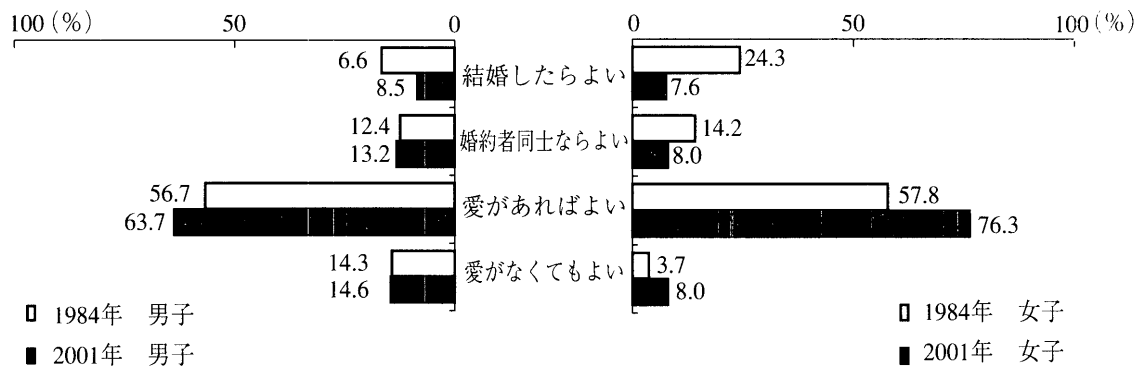


図2 性交をしてもよいとする条件

女子の場合は、1984年の経験者に「結婚したらよい」「婚約者同士ならよい」という意見は全くなく、「愛があればよい」という意見が未経験者60.8%に対して経験者82.1%と高値を示した。2001年も経験者に「結婚したらよい」という意見がなく、「愛があればよい」が80.6%と高く、未経験者でも74.3%と差がなくなりつつある。「愛がなくてもよい」は未経験者より経験者の方に多く、兩年とも男子にはおよばないが16~17%みられた(表10)。

4) 性行動について

性行動については、それぞれの経験率が、1984年に比べて男女ともあきらかに増加していることがわかる。特に「セックス」では、男子6.9%が16.0%、女子では5.9%が約5倍の26.6%と高値である。また興味深いことは、「キス」「ペッティング」「セックス」のそれぞれの経験率がすべてにおいて女子の方が男子を上回っていた(図3)。

避妊の方法について知っているものとして、1984年と2001年、また男女ともに9割以上が「コンドーム」をあげている。男子では

表10 性交をしてもよいとする条件

(%)

	男子				女子			
	1984年		2001年		1984年		2001年	
	経験者	未経験者	経験者	未経験者	経験者	未経験者	経験者	未経験者
結婚したらよい	2.4	7.2	0	10.3	0	22.6	0	10.6
婚約者同士ならよい	0	16.0	2.9	15.5	0	13.4	3.0	10.1
愛があればよい	61.0	60.9	67.6	63.2	82.1	60.8	80.6	74.3
愛がなくてもよい	36.6	15.9	29.4	10.9	17.9	3.2	16.4	5.0

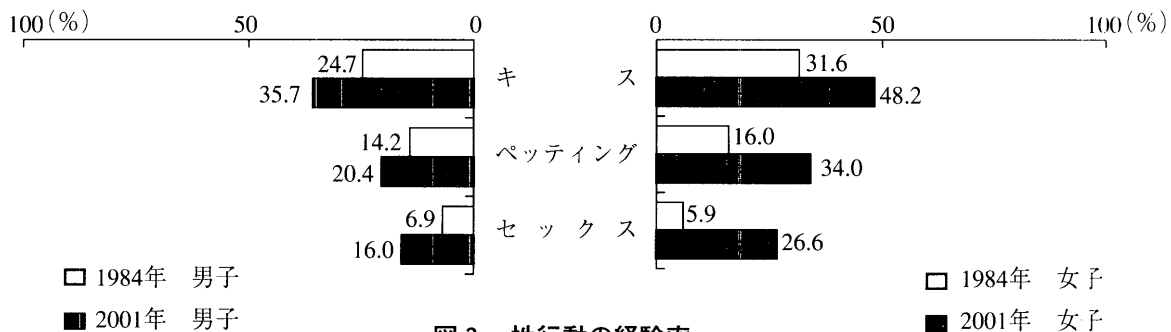


図3 性行動の経験率

1984年「膣外射精」が69.6%から2001年46.4%と減少し、また「オギノ式」や「基礎体温法」「ペッサリー」「子宮内リング」も減少している。また同様に女子においても、「オギノ式」や「基礎体温法」「子宮内リング」が減少していた。コンドームやピルが現在の避妊方法の選択肢として認識されている（表11）。

性交経験の有無との関連では、表12のように有意差のあった項目は、経験者の男子では未経験者に比べて「膣外射精」「オギノ式」「ペッサリー法」が高く、女子では「膣外射精」「基礎体温法」「殺精子剤」「ペッサリー法」「ピル」「子宮内リング」について高かった。この「膣外射精」については、経験者の

男子65.6%、女子61.5%と6割が避妊方法として認識していた（表12）。

性交時の避妊実施状況は、2001年のみの値では、「毎回必ずする」という者が男子では37.5%、女子では50%である。しかし「避妊していない」「相手に任せている」という不確実な避妊は男女とも約25%に達していた（図4）。

5) 性教育について

まず性について知りたいことについては、1984年の質問項目に追加をして今回調査をした。1984年と2001年に男女とも共通して上位を占めていたものは、「異性との交際の仕方」

表11 避妊方法の知識（複数回答可） (%)

	男子		女子	
	1984年	2001年	1984年	2001年
コンドーム	93.9	95.8	91.7	96.3
膣外射精	69.6	46.4	48.9	34.2
オギノ式	67.6	18.8	47.1	19.6
基礎体温法	62.8	28.6	73.3	46.7
リズム法	11.2	4.7	4.6	5.0
ペッサリー	59.9	25.0	31.0	27.5
殺精子剤	54.9	33.9	32.9	34.2
ピル	76.2	64.6	75.8	71.3
子宮内リング	69.6	13.5	53.1	18.8
卵管結紮	23.3	4.7	17.4	3.8
精管結紮	29.4	7.8	16.2	5.4

表12 避妊方法の知識と性交経験の有無（複数回答可） (%)

	男子			女子		
	2001年		p(①vs②)	2001年		p(①vs②)
	①経験者	②未経験者		①経験者	②未経験者	
コンドーム	100.0	94.9		100.0	94.9	
膣外射精	65.6	41.7	*	61.5	24.0	**
オギノ式	37.5	14.4	**	24.6	17.7	
基礎体温法	40.6	25.6		67.7	38.9	**
リズム法	12.5	2.6		9.2	3.4	
ペッサリー	40.6	21.8	*	38.5	23.4	*
殺精子剤	46.9	30.8		49.2	28.6	**
ピル	78.1	61.5		86.2	65.7	**
子宮内リング	31.3	9.6		30.8	14.3	**
卵管結紮	9.4	3.2		10.8	1.1	
精管結紮	15.6	5.8		15.4	1.7	

(2001年の調査のみ)

* p < 0.05 ** p < 0.01

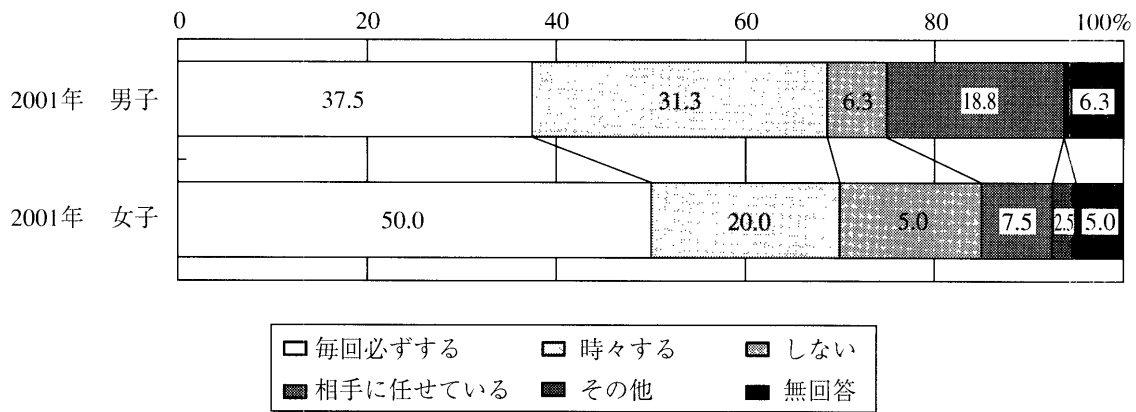


図4 性交時の避妊の状況

が約3割、「愛とは何か」が2～3割であった。また2001年に限って次に多かった項目として、男子の場合「性交」「自分の体が完全かどうか」、女子では「性行為感染症」「避妊」など具体的な性行動に関する内容が高かった(表13)。

また今回新たな質問項目として、「性に関する指導の手引き」を参考に性の生理的側面、心理的側面、社会的側面の3つに分け、小学校、中学校、高等学校でそれぞれ受けた性教育について、特に印象に残っている内容を調査した。その回答から上位5項目と「覚えていない」ものを表した。表14のように、小・中・高等学校とも上位5項目のほとんどが生

理的側面に関する内容であった。また男女で有意差がみられた項目は、小学校では「体の発育と個人差」「体の変化」「生命誕生」、中学校では「月経や射精」、高等学校では上位5項目すべてが男子に比べて女子に多かった。

「覚えていない」とする者も少なくなく、高等学校の段階ですら男子28.8%、女子18.8%であった(表14)。

印象に残っている内容の上位5項目と性交経験の有無との関連について男女別に示した。まず男子は表15のように、経験の有無で有意差がまったくみられなかった(表15)。それに対して女子の場合は表16に示したよう

表13 性について知りたいこと(複数回答可)

	男子		女子	
	1984年	2001年	1984年	2001年
異性との交際の仕方	29.3	29.7	32.5	25.1
愛とは何か	17.2	22.8	18.9	31.8
性欲の処理の仕方について	10.0	12.8	3.3	8.6
自分の体と異性の体の構造や働きについて	8.7	10.0	3.9	5.9
自分の体が完全かどうか	12.8	19.6	11.4	10.2
男性と女性の役割	4.8	8.2	4.4	3.9
性は人生にどういう意味を持つのか	8.5	9.1	7.9	5.5
人間の性は他の哺乳動物に比べて違うか	2.2	3.7	1.1	2.4
性交	—	21.9	—	18.0
妊娠	—	9.6	—	18.0
避妊	—	11.4	—	21.2
人工妊娠中絶	—	5.5	—	12.2
性行為感染症	—	13.7	—	23.5
その他	—	5.5	—	4.3
無回答	—	15.1	—	11.8

表14 印象に残っている性教育の内容について上位5項目（複数回答可） (%)

		①男子	②女子	
		2001年	2001年	p(①vs②)
<小学校>				
生理的	体の発育と個人差	26.0	38.0	*
生理的	性器のしくみ	26.5	31.4	
生理的	体の変化（初潮、精通）	19.2	46.7	**
生理的	生命誕生（受精の仕組み、性の決定と遺伝）	18.7	31.0	**
生理的	体の清潔	16.9	12.5	
心理的	異性への関心	11.9	14.1	
	覚えていない	48.9	36.1	**
<中学校>				
生理的	体の発達と男女差、個人差	37.0	38.4	
生理的	内分泌機能の発達と第二次性徴	22.4	31.0	
生理的	月経、射精	31.5	44.3	*
生理的	生命誕生の意義（仕組み）	21.0	27.8	
心理的	性欲と性行動の関係	21.9	18.8	
	覚えていない	37.4	38.0	
<高等学校>				
生理的	生命誕生（性交、受胎、分娩）	35.2	49.4	**
生理的	人工妊娠中絶の問題点	21.9	38.8	**
生理的	性行為感染症（性病など）の種類と予防、早期発見	27.4	45.9	**
生理的	避妊法とその効果	23.3	41.6	**
心理的	欲求と適応	25.6	39.6	**
	覚えていない	28.8	18.8	**

(2001年の調査のみ)

* p < 0.05

** p < 0.01

表15 印象に残った性教育の内容と性交経験の有無（複数回答可） 2001年 男子 (%)

<小学校>		①経験者		②未経験者
	性器のしくみ	30.3	体の発育と個人差	28.5
	体の発育と個人差	24.2	性器のしくみ	26.7
	生命誕生	18.2	体の変化	21.5
	体の清潔	15.2	生命誕生	19.8
	性被害の防止	15.2	体の清潔	18.0
	覚えていない	54.5	覚えていない	51.2
<中学校>				
	体の発達と男女差、個人差	33.3	体の発達と男女差、個人差	40.8
	月経、射精	27.3	月経、射精	34.3
	性欲の男女差、個人差	21.2	内分泌機能の発達と第二次性徴	24.3
	性欲と性行動の関係	18.2	性欲と性行動の関係	23.1
	生命誕生の意義	18.2	生命誕生の意義	23.1
	内分泌機能の発達と第二次性徴	18.2		
	覚えていない	51.2	覚えていない	37.9
<高等学校>				
	生命誕生	37.9	生命誕生	40.9
	人工妊娠中絶の問題点	31.0	性行為感染症の種類と予防、早期発見	31.4
	性行為感染症の種類と予防、早期発見	31.0	欲求と適応	30.8
	避妊法とその効果	27.6	避妊法とその効果	25.8
	欲求と適応	20.7	人工妊娠中絶の問題点	23.3
	恋愛	20.7		
	覚えていない	41.4	覚えていない	32.1

(2001年の調査のみ)

に、中学校では「内分泌機能の発達と二次性徴」「性欲と性行動の関係」、高等学校では上位5項目にはない「生命尊厳」「性の不安と悩み」「恋愛」「結婚・離婚」について経験者の方に多かった(表16)。

また性について考える時、或いは行動する時に性教育が役に立っているかという評価については、「大変役に立っている」「役に立っている」を合わせると男子は4割、女子は5割であった。逆に「あまり役に立っていない」

表16 印象に残った性教育の内容と性交経験の有無(複数回答可) 2001年 女子 (%)

<小学校>	①経験者		②未経験者	p(①vs②)
体の変化	47.0	体の変化	47.8	
体の発育と個人差	34.8	体の発育と個人差	40.1	
性器のしくみ	31.8	生命誕生	33.5	
生命誕生	25.8	性器のしくみ	31.9	
異性への関心	21.6	体の清潔	12.1	
覚えていない	40.9	覚えていない	35.2	
<中学校>				
月経、射精	50.0	月経、射精	43.4	
体の発達と男女差、個人差	43.9	体の発達と男女差、個人差	37.9	
内分泌機能の発達と第二次性徴	42.4	生命誕生の意義	30.2	
性欲と性行動の関係	28.8	内分泌機能の発達と第二次性徴	27.5	
性欲の男女差、個人差	24.2	性欲の男女差、個人差	15.9	
		男女の心理の違い	15.9	
(有意差のあるもの)		(有意差のあるもの)		
内分泌機能の発達と第二次性徴	42.4	内分泌機能の発達と第二次性徴	27.5	*
性欲と性行動の関係	28.8	性欲と性行動の関係	15.9	*
覚えていない	40.9	覚えていない	37.9	
<高等学校>				
生命誕生	62.1	生命誕生	50.3	
性行為感染症の種類と予防、早期発見	54.5	性行為感染症の種類と予防、早期発見	47.9	
人工妊娠中絶の問題点	51.5	避妊法とその効果	43.1	
欲求と適応	51.5	欲求と適応	39.5	
避妊法とその効果	50.0	人工妊娠中絶の問題点	38.3	
(有意差のあるもの)		(有意差のあるもの)		
生命尊厳	18.2	生命尊厳	8.5	*
性の不安と悩み	18.2	性の不安と悩み	8.4	*
性に関する問題行動	21.2	性に関する問題行動	10.2	*
恋愛	27.3	恋愛	13.2	*
結婚	28.8	結婚	12.6	**
覚えていない	22.7	覚えていない	19.2	

(2001年の調査のみ)

* p < 0.05 ** p < 0.01

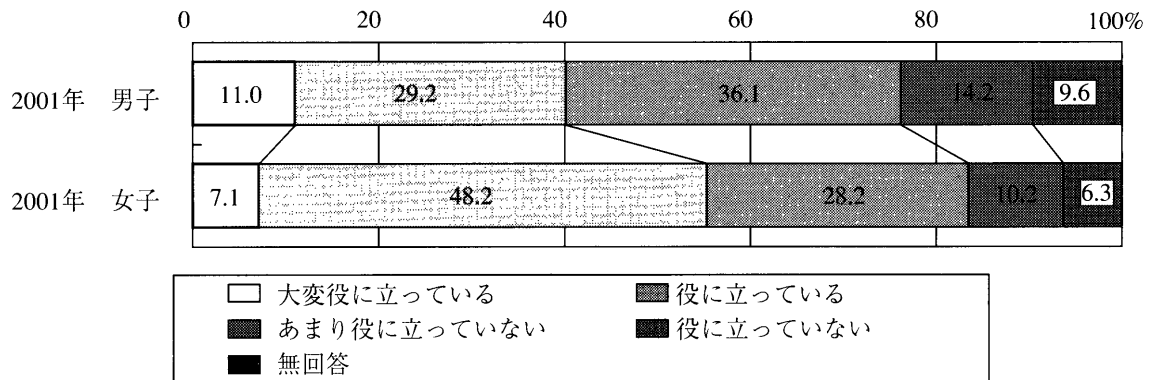


図5 性教育の評価

表17 性教育の評価と性交経験の有無

(%)

	2001年 男子		2001年 女子		p(①vs②)
	①経験者	②未経験者	①経験者	②未経験者	
大変役に立っている	21.2	10.4	15.2	4.7	**
役に立っている	30.3	31.9	56.1	50.6	**
あまり役に立っていない	36.4	41.1	24.2	32.9	**
役に立っていない	12.1	16.6	4.5	11.8	**

(2001年の調査のみ)

* p<0.05 ** p<0.01

「役に立っていない」は男子の半数にみられた(図5)。性交経験の有無との関連では、男子には有意差がなかったが、女子では性交経験者に「大変役に立っている」「役に立っている」が未経験者に比べて高く(p<0.01)、「あまり役に立っていない」「役に立っていない」とする者は、未経験者に高かった(p<0.01)(表17)。

IV 考察

上記の結果をふまえ、調査項目と性交経験の有無の関連を中心に考察をくわえる。

1) 社会的適応について

高校生を理解する上で、日常生活として家庭や学校生活など集団生活での適応のあり方が性にどのように影響しているか把握することは重要である。その社会的適応として家庭、学校、友人関係について、1984年と2001年とを比較してみると、約半数が適応している。これは日本性教育協会²⁾の家庭や学校生活、友

人関係の満足度に関する調査結果と一致している。

それぞれの満足度と性交経験の有無で比較してみると、1984年では男子の場合家庭、学校生活、友人関係について未経験者より経験者の方の満足度が高く、同時に「楽しくない」という不満感も、友人関係を除いては経験者の方に高かった。女子の場合家庭、学校生活、友人関係の満足度は未経験者の方が高く、「楽しくない」とする者は経験者の方が高かった。このことは、家庭や学校生活、友人関係に「楽しくない」と何らかの不満を感じている者が未経験者に比べて経験者の方に多いことから、その不満や寂しさなどが性行動に結びついてしまうのではないかと考えられた。また当時の東京都の調査報告も同様な傾向であり、「家庭、学校への評価として不満層に性交経験率が高い傾向があった」と報告していた。

一方2001年の結果は、男子の経験者の満足度は、未経験者に比べて家庭、学校生活の満足度は低い、友人関係においては経験者の

方が高い。また「楽しくない」は家庭、学校生活、友人関係のいずれも未経験者に比べて多かった。それに対して女子の経験者の満足度は、家庭、学校生活、友人関係の満足度が経験者と未経験者との差が少ないため、明らかな傾向はみられなかった。また「楽しくない」も家庭、学校生活には差がなく、友人関係においてのみ減少していた。ただ女子で唯一の変化がみられたのは、1984年と2001年の経験者と比較してみると、2001年の経験者は家庭、学校生活、友人関係のすべてにおいて「楽しくない」が減少していたことであった。

今回の調査では、女子の傾向は明らかにならなかったが、女子の経験者と社会的適応の関係について、上田⁵⁾は高校生の性意識と性行動について家族との関係をみており、その中で、「家庭要因、代表的な項目として家庭生活は楽しくないという割合は、女子の逃避としての性交体験に関連して述べられることが多い。しかし性交体験者の約8割が家庭生活を楽しいと回答していることから、ごく少数の女子が逃避としての性行動であり、大多数の女子は家庭要因とは関連がないのではないかと考えている」と報告している。一方、日本性教育協会⁶⁾では、「女子の方が家庭に不適応を示す者ほど性行動が活発化する傾向がみられた」といった結果が示されており、一つの調査だけで規定するのは難しく検討の余地が考えられる。友人関係については、2001年の男子の経験者、女子の経験者ともに未経験者より満足度が高い。このことは、日本性教育協会⁷⁾の「性交経験の有無に関係なくかなり満足度が高く、これは交友の範囲が広い高校生ほど異性交際にも積極的で、性行動が活発化するためではないか」という分析内容は、本調査の結果とも一致する。

2) 性情報について

情報化の進展に伴い、テレビやラジオはもちろんのこと週刊誌や漫画コミックなど多種に渡る性情報が、マスメディアを通じて流され、選択の余地のないまま若者達の生活に入ってきている。これらの性情報の増大に伴い、1990年代になるとポケットベルに始まり、PHS、携帯電話といったパーソナル・コミュニ

ケーションのためのメディアが急速に普及していった。またパソコンの普及に伴ってインターネットを通じて流される性情報が問題視されるようになってきている。

これらマスメディアの中の週刊誌や雑誌などの性行動に関する内容や記事とアダルトビデオの視聴については、本調査でも全体的によく接している。しかし性行動に関する週刊誌や雑誌を読んだことのない者が1984年より2001年が増えているが、これは性に関する情報源が週刊誌や雑誌だけでなく、多種多様な経路があることに起因していると考えられる。またこれらの情報に対する反応も様々であり、「みんなもそうなんだ」という集団心理的な傾向や、「みんなに比べて自分は遅れている」という流行的な感覚もあり、マスメディアのもたらす影響について考えさせられる。都筑⁸⁾は、性知識の入手方法として、「男女とも『友人(先輩)』『雑誌』から入手する者が4～6割に上り、ついで『メディア』を選んだものが男子30%、女子12%」であり、その結果から「高校生が得ている性情報は商業的なものに片寄せざるを得ず、メディアリテラシーについての教育が不可欠である」と述べている。

また性交経験者では、未経験者に比べて性情報により多く接触していた。特に興味深かったのはアダルトビデオの視聴について、経験者の男子は全員が見ていたことである。このことは、日本性教育協会⁹⁾の報告や木村¹⁰⁾、¹¹⁾や赤川¹²⁾の調査とも一致している。アダルトビデオは、「性描写といった刺激が性行動の促進効果を示すもの」や「性交場面の描写、性交過程を『線』的なものとして描くために他の性表現メディアに比して性交欲求、性行為マニュアルとして利用される可能性が高い」という特徴もっている。

3) 性意識について

性に対するイメージについては、性の否定的なイメージが全体的に減り、肯定的なイメージが増えている。これは、若者達が多種多様な性の情報に接していることや情報を最も多く得ているのが「友人」であり、さらには学校での性教育の実施などの要因から、性

が「恥ずかしいもの」あるいは「隠されるべきもの」という認識が薄れてきていることがこのような結果を示したといえる。しかし一方では、性交経験の有無に関係なく、一昔前のように性をタブー視するような意識が残っている者も少なくない。また性のイメージと性交経験の有無では、経験者に性交を許容し、肯定的に捉える言葉として「セックスは人間にとって大切なもの」「愛を確かめるためにセックスは必要である」が女子の6～8割を、男子はそれよりも高く8～9割を占め、次に「セックスは楽しいもの」が8割とつづいている。

性交をしてもよいとする条件については、「愛があればよい」という意見が多く、本調査の結果と似た傾向が他の調査でも多く示されている。都筑らは、性交への見解として性交経験の有無にかかわらず、男女とも約8割が「互いに納得すれば可」「愛情が深まれば可」など性交を容認していると報告している。また竹井は、婚前性交の肯定見解は「交際が進み、愛情が深まれば性交してよい」をキーワードに増えており、「婚前性交の否定見解は、高校生男子7.1%、女子13.4%と低く、それは『性交』が経験の有無に関わらず、高校生にとって身近な課題になっていることを意味する」と報告している。これらより、性交に対する意識は、積極的かつ開放的であり、その傾向は女子に高く男子を乗り越えている。

一方、「愛がなくてもよい」という者が男子では経験者の30%に、女子では16～17%にみられた。これは性交をしてもよい条件として愛がなくても性交をしてもよいことを肯定していることになる。「愛のない性交」を肯定することについて、日本性教育協会¹⁵⁾では性規範意識を規定する要因から分析し、次のような示唆を導いている。すなわち、婚前交渉については愛し合っていればかまわないという考え方が多数を占め、性と結婚の関係については規範意識の変化がすでに明確に示されている。また、愛し合っていないにもかかわらず、性の開放が進んでいるのかを一つの焦点とし、性と恋愛の関係を問うことも今後、取り上げていく必要があると思わ

れる。

4) 性行動について

青少年の性行動は、1990年代に入って高校生段階を中心に男女とも性行動が活発化する傾向がみられ、特に女子の性経験率が男子のそれを上回るという従来の常識からすれば逆転現象が生じている（「男女の収斂化」あるいは「女子の乗り越え現象」とも表現されている）。

本調査における性行動の経験率（図10）でも1984年に比べ2001年の方がよりその傾向が顕著に示されている。他のいくつかの調査でも同様の報告がされており、近年の女子の性行動の活発化を反映しているものといえる。落合¹⁶⁾は、性行動の活発化・早期化を指摘しているが、それは「特に高校生年齢で著しく、学年が上がるごとに経験率が1割ずつ上昇する。その結果、男女とも17歳で約3割が経験し、男子は20歳で、女子は21歳で半数を超える」としている。また「近年の特徴は女子の性行動の活発化で、そのためこれまでみられていた男女差がほとんど開かなくなっている」とも述べている。小田¹⁷⁾は、性交経験者の累積率を見ると、性交体験者は増加し、1996年から男子と女子の逆転現象を指摘している。その背景として、「女性の社会進出に伴い性の解放がすすんだのか、又は結婚まで処女説が風化してしまったのか根拠は特定できないが、『低くなった性交のハードル』」として危惧を感じている。また日本性教育協会の全国調査（1999年¹⁸⁾）の男子26.5%に対して本調査が16.0%と少ないが、女子では23.7%に対して26.6%と全国より高い数値になっている。このことは、男女差だけでなく地域差もむしろなくなりつつあると思われる。このように、高校生における性交への抵抗感のなさ、実際に経験する者の多さから、「性交の日常化」や性交がある種の「通過儀礼」のように受とめられる風潮が生じているともいえる。

次に避妊方法の知識として男女ともさまざまなものの上げている。中でも古典的避妊法と呼ばれるものには、膣外射精、リズム法、ペッサリー、殺精子剤などがある。男性用コンドームも正しく使用しないと避妊効果が劣

るので古典的といえるが、性感染症予防具として見直され脚光を浴びている。

本調査でも、男女共に経験者の全員がコンドームを認識している。現時点で望まない妊娠や性行為感染症を予防する方法としてコンドームの必要性が周知されているのは、性教育の効果として、評価できるものと考えられる。

一方、膣外射精については、全体的な傾向としては減っているにもかかわらず、男女共経験者の6割が避妊方法としてあげている。これはアダルトビデオ等による性描写の影響が大きいものと推測できよう。

また避妊方法の知識をもっていることと実際の場面で実行できることとは大きなギャップがある。本調査でも「必ずする」者が6割であり、3割は「避妊をしていない」、「相手に任せている」といった結果であった。他の調査で、佐藤¹⁹⁾は性交経験のある者の6割が「必ずした」と答え、1割が「全くしていない」と報告している。また小田²⁰⁾は「避妊をした」者が5割、「避妊をしない、もしくはした時としない時がある」者が5割を占めており、さらに避妊の必要性を理解しないで性交体験をする傾向にあることを指摘している。やはり、最近の性行動の活発化、低年齢化している現状を考えると、何歳から性交してもよいという問題ではなく、性の行動が始まった時点から、性交と避妊、性交と感染症の予防について若者達のニーズに適した学習をし、理解し、実施できる自己決定能力を育てる教育が必至である。そして女性が自分の性と生殖を相手まかせにするのではなく、主人公になれるようリプロダクティブ・ヘルスを高めていくことが重要である。

5) 性教育について

性教育を考える上で、若者たちが性について何を知りたいと思っているのかというニーズを把握することは大変重要である。またそのニーズは彼らを取り巻く様々な環境に伴って変化していくものであると推測される。しかし、今回の調査結果では「性について知りたいこと」の上位は、1984年と2001年とも「異性との交際の仕方」「愛とは何か」であり、両年において変化はみられず、どちらも男女

の人間関係に関連しているものであった。日本性教育協会²¹⁾においても私たちの結果と同様な傾向である。これらの結果から昨今、よく言われるように青少年の性が即物的、ハウツー的なもののみを志向しているのではなく、精神的なつながりを強く求めていることの反映であると思われる。また男女の関係を含めた人間関係のあり方について、各年齢の発達段階の特徴を踏まえながら繰り返し話題にしていくことが重要である。

印象に残っている性教育の内容については、各学校において年齢に沿った内容が取り上げられてはいるものの、生理的なテーマが中心であり、性についてのニーズにあるような心理的および社会的なテーマについては少ない結果であった。また性交経験との関連では、女子の経験者に、「恋愛」や「結婚」など社会的側面についての印象があり、より身近なものとして捉えているようである。これらのことから性教育は、「生きるための教育」²²⁾「自立と人権尊重をめざす性教育」²³⁾と言われて久しいが、現状はあまり改善されていないのではないだろうか。日本性教育協会²⁴⁾は、「性に関して生理的側面はもちろんのこと、性行為及びそれに付随する側面や心理的側面に踏み込んで取り上げられる機会は少ない。また価値判断を含む性の社会的側面、社会的問題とされる性的事象なども学校での性教育の中でどのように取り上げていくのか、或いは取り上げる必要がないのかについて検討する必要がある」と示唆している。

性教育の評価については、全体的に「役に立っていない」という回答が多く、日本性教育協会²⁵⁾の調査でも同じであった。「役に立つ」性教育とは、性的主体・当事者である若者達のサイドにたった性教育のあり方について各関係機関と連携しあいながら、よりよい方向に向かって取り組んでいく姿勢が必要である。そしてさらに「今後の性教育に求められているのは、ジェンダー・バイアスの是正・解消を志向しつつ、広く性的マイノリティの人権を考える姿勢であり、性に関する価値観や規範をもその俎上に載せて議論すること」²⁶⁾であろう。

V 終わりに

1984年に実施した高校生の調査結果をもとに、今回新たな質問項目を追加して比較検討を通して高校生の社会的適応、性情報や性意識、性行動について検討した。時代の経過とともに、男女とも性交経験が増加し、また性交経験の女子においては家庭、学校、友人関係の満足度が高かった。一方、性情報や「愛とは何か」といった男女の人間関係の結びつきについては、今も昔も変わらず関心が高いことがうかがえた。さらに性教育のあり方も若者達のニーズに適した内容を指導し、自分の性について自己決定できる力を育てるような教育が必至であることを痛感した。

今後は、調査結果から得られた知見をさらに発展させ、性的主体・当事者である若者達のよりよく豊かな性のあり方を追求し検討を進めて生きたい。

最後に、今回の調査にご協力をいただいた高等学校の諸先生方、高校生の皆さまに深謝いたします。

註

- 1) 1989年に新潟県教育委員会から提出された「性に関する指導手引き」の性に関する指導の指導内容について、発育・発達の特性をふまえた小・中・高等学校の校種別に3つの側面に分けたものを参考にした。性の生理的側面（体の発育と個人差、生命誕生、月経と射精、性行為感染症など）心理的側面（異性への関心、男女の心理の違い、性欲と性行動、性の不安や悩みなど）社会的側面（男女の協力と思いやり、異性との人間関係、性情報の受けとめ方、性に関するする問題行動など）

引用文献

- 1) 小林かよ子、佐藤芳昭. 高校生の生活と性についての意識調査. 母性衛生 1986; 27 (2) : 303-310
- 2) 財団法人日本性教育協会. 「若者の性」白書 第5回青少年の性行動全国調査報告. 東京: 小学館; 2001 31-34
- 3) 小林かよ子、佐藤芳昭. 高校生の性経験とその背景について. 思春期学 1986; 4 (1) : 62-67
- 4) 東京都生活文化局. 東京都青少年問題調査報告書 大都市高校生の性をめぐる意識と行動 — その実態と生活環境・心理的特徴との関連 — 東京: 東京都生活文化局広報部都民資料室; 1982 129-149
- 5) 上田公代. 高校生の性意識と性行動 — 家族との関係より — 思春期学 1995; 13 (2) : 122-128
- 6) 前掲2) 31-34
- 7) 前掲2) 31-34
- 8) 都筑芳子、宝田知恵子、河合久代ほか. 群馬県における平成12年度高校生の性意識・性行動に関するアンケート調査. 思春期学 2002; 20 (2) : 293-295
- 9) 前掲2) 79-82
- 10) 木村龍雄、皆川興栄、園山和夫. アダルトビデオ視聴経験の有無と性意識・性行動との関連に関する研究 (第1報) — 高校生および大学生を対象として — 思春期学 1996; 14 (3) : 309-317
- 11) 木村龍雄、皆川興栄、園山和夫. アダルトビデオ視聴回数と性交意識・性交欲求・性交経験との関連に関する研究 (第2報) — 男子高校生および大学生を対象として — 思春期学 1996; 14 (3) : 318-325
- 12) 赤川学. 性欲の巨大市場 — アダルトビデオのポリデスケー imago1996; 4 (12) : 138-147
- 13) 前掲8) 293-295
- 14) 竹井操. 都会における中・高校生の性意識・性行動. 思春期学 1995; 13 (2) : 116-121
- 15) 前掲2) 60-65
- 16) 落合良行、伊藤裕子、齋藤誠一. ベーシック現代心理学4 青年の心理学 [改訂版]. 東京: 有斐閣; 2002 71-89
- 17) 小田洋美. 中高校生の性行動と避妊. 助産婦雑誌 1999; 53 (11) : 53-58
- 18) 前掲2) 11-13
- 19) 佐藤龍三郎、兵井伸行、福島富士子ほか. 高校

- 生の性意識、性役割観、性行動に関する研究（第1報）. 思春期学 1995；13（3）：243-248
- 20) 前掲17) 53-58
- 21) 前掲2) 126-130
- 22) 小田切明徳. 性をしなやかに. 京都：かもがわ出版；1992 77-79
- 23) 山本直英. 性教育ノススメ. 東京：大月書店；1987 220-237
- 24) 前掲2) 130-132
- 25) 前掲2) 132
- 26) 前掲2) 130-132

参考文献

- 1) 佐藤芳昭、小林かよ子. 高校生の性経験. 産婦人科治療 1987；54（4）：427-431
- 2) 山本直英. 性教育ノススメ. 東京：大月書店；1987
- 3) 高田百合子、新井利栄、高村寿子ほか. 性の意思決定に関する調査研究 —高校生に対する適切な教育方法の提案— 思春期学 1994；12（3）：268-275
- 4) 北村邦夫. 思春期の性の悩みとその対応. 思春期学 1995；13（2）：129-134
- 5) 福富護. 思春期の性意識と性行動. 思春期学 1995；13（2）：148-153
- 6) 木村龍雄、皆川興栄. 学生のための性とエイズ. 東京：朝倉書店 1997
- 7) 志賀くに子. 高校3年生の性の実態とその悩み —秋田県内6校のアンケート調査から— 母性衛生 1998；39（4）：351-355
- 8) 早乙女智子. 解説・近代的避妊法. 助産婦雑誌 1999；53（11）：40-45
- 9) 松本清一. 日本性科学体系／別冊 アジアの性科学研究. 東京：フリープレス星雲社；2002